
魔法少女まどか☆マギカ ～人魚の歌声～

icsbreakers

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか☆マギカ 〈人魚の歌声〉

【Nコード】

N9049Z

【作者名】

icbreakers

【あらすじ】

あるとき美樹さやかは白井雪良から一緒に魔女を倒して欲しいと頼まれる。

その実行日は見滝原中で開催される年に一度の文化祭の日。
楽しい文化祭と、魔女退治。

さやかの波乱の一日が幕を開ける。

前日 16:00 (前書き)

文化祭編の開始です。

まったりと連載していきたいと思います。

前日 16:00

秋空もすっかり見慣れたこの頃。

夏の熱気にあふれた光景はまったく無く、あるのはゆっくりゆっくりと落ちていく枯葉ばかりだ。

そんな中、見滝原中学校はその光景とは正反対の賑やかな風貌を見せていた。

明日は年に一度の文化祭。

各クラス、各部活が各々の見世物をより良く見せようと躍起になっていた。

美樹^{みき}さやかもそのうちの一人だった。

さやかは同級生の梶浦^{かじうら}優子がやっているバンドの演奏を手伝うことになった。

そのための練習でここ一カ月音楽室に籠りっぱなしだった。

「さっすが、ミキティ。筋がいいわぁ」

ドラムセットを前にして座る優子が手を叩いて褒め称えた。

「やるからには徹底的にやらないと気がすまないのよね」

さやかはそう言いながら辺りを見渡した。

「そういえば白井さんは？」

ボーカルを担当する白井雪良しらいせつらがいなかった。

「せっちゃんはたぶん西棟の空き教室じゃないかなあ？」

「なんでまた？」

「昔から本番の前日には人気の無いところで心を落ち着かせてるのよ。この学校に来てからは西棟の空き教室がその場所になってるのよ」

「へえー」

さやかは未だに雪良に言われたことが気になっていた。

”私は変なことなんて言っていないよ？あなたと私は似たもの同士なの”

あの言葉の意味が何なのか、前は聞くタイミングを失ってしまい、結局聞けなかった。

「私、ちょっと様子みてる」

「そう？んじゃ、せっちゃん連れ帰ってきてよ。前日だし、ちゃんと皆で練習しておかないとさ」

「うん、わかった。ちょっと行って来るね」

さやかはギターをおろすと、音楽室を出て行った。

西棟は主に生徒が自由に使える空間として用意された変わった棟だ。

図書館や校内カフェテリアなどの施設、生徒が様々な用途で使用する多目的教室を設けている。

多目的教室では委員会などの会議から部活動の練習場などとして使用されているが、教室数もそれなりに多く、使用頻度もそれほど高くないため、よく空き教室化していた。

さやかもカフェを利用するために西棟にはよく来るが、ほかの教室に目を向けたことなど今までなかった。

さやかは優子に教えられた場所にたどり着くと、とりあえず窓から教室の中を覗いた。

「あれ？ いない……。すれ違ったのかなあ」

「すれ違ったって誰と？」

「!?!?」

さやかは突然背後からした声に、声にならない悲鳴をあげた。

「し、白井さん!?!?」

背後に立っていたのは雪良だった。

「私を探しに来たの？」

「そ、そう！ そうなのよー！」

「ふーん。まあ、いいわ。私もちょうど美樹さんにお話があったから」

雪良は教室の扉を開けて中に入った。

そしてさやかを手招きして中に入るように促した。

雪良はさやかが教室の中央くらいまで行ったのを確認すると、扉をしめた。

「ここって西棟の一番端なの。だから誰も来ないし、いくら大きな声出したって聞こえないわ」

「へー……そう——」

扉を背にして、まるで扉を守るように立つ雪良。

その雪良の顔にはどこか妖艶さが漂っていた。

さやかはその顔に妙なざわめきを感じた。

「あ、あの……話って」

さやかは雪良から目を離し、思いついた言葉を放った。

雪良はさやかの言葉を見せず、さやかに詰め寄った。

「え、えっと……」

さやかは距離を置こうと一歩下がった。

だが雪良がまた一歩つめる。

それを繰り返しているうちに、さやかの背は教室の壁についてしまった。

「だからっ、いったいなんな——」

目の前に頬を少し赤らめ、目を閉じた雪良の顔がいつの間にかあった。

声にならなかった。

なぜならさやかの唇は雪良の唇によって塞がれてしまっていたのだから。

文化祭の準備でざわめく外の音が、静まり返った教室の中に響き渡っていた。

前日 16..10

さやかは突然の出来事に一瞬気が遠のいていた。

だがすぐに頭の中に今起きた出来事が猛スピードで再生され、一気に顔が熱くなった。

「ななななあー!?!」

さやかは訳のわからない奇声をあげた。

雪良はクスリと笑った。

「人魚の歌声。それが私の魔法よ」

「ま、魔法……?」

さやかの中で熱くなっていたものが一気に冷めていった。

魔法という言葉。

それがさす意味はたった一つだ。

「白井さんも魔法少女?」

「そう。美樹さんと同じ、魔法少女」

「でもそれとき、キスは関係ないんじゃない?」

さやかは自分で口にしたことが恥ずかしく、何だか落ち着かない気持ちになった。

「私の『人魚の歌声』は聞いた相手を魅了させることで、動きを封じるものなの。夢中で周りが見えなくなるって感じかな」

さやかは、問いに答えることもせずただ淡々と語る雪良に少しムツとなった。

「だからそれとこれとは――」

美しい歌声が聞こえた。

その歌声の前ではすべてが雑音に思えてしまうくらい美しかった。

さやかはハッとした。

その歌声が目の前にいる雪良から出ているものだど理解すると同時に、『人魚の歌声』の能力が発動してしまっていることに気がついたのだ。

「あ、あれ？」

気がつくことが出来た。

周りが見えなくなる魔法にかかってしまっているはずなのに、しっかりと思考できているのだ。

「『人魚の歌声』を聴いた人みんなが術中にはまってしまったら大変でしょ？だからちゃんと回避する方法があるの」

そう雪良に言われ、さやかは思わず指で自分の唇を触った。

「キス……」

「そう。正確には私の口を塞ぐこと」

雪良は自分の口に両手の人差し指で作ったバツテンをあてた。

「塞ぐこと……? ってじゃあ、キスじゃなくていいんじゃないの!」

「うふふ。サービスよ、サービス」

「そ、そんなっ、サービスいらんわっ」

慌てふためくさやかに雪良はクスクス笑った。

「ごめんね。ちょっとからかい過ぎたわ。でもただ無闇に私の魔法を回避させたわけじゃないの」

「ど、どういふこと?」

さやかは真面目な顔でそう言う雪良を見て、釣られるようにしておとなしくなった。

「美樹さんに協力して欲しいの」

「協力って?」

「魔女と一緒に倒して欲しいの。絶望の魔女・レイアーノを――」

前日 16..15

雪良は誰もが認める歌唱力を持っていた。

その美しい歌声は瞬く間に広がり、10歳の頃にはテレビ番組に出演するくらいになっていた。

雪良の歌声は聴く人から『希望の歌声』と呼ばれた。

雪良の歌を聴くと、どんなに落ち込んでいても元気になれる。

前向きに進んで行こうと思える。

希望が持てるようになると評価されたのだ。

雪良もそう評価される自分の歌が希望だった。

この歌があれば何でも出来る。

人々に希望を与えることが出来る。

そう思うと雪良は嬉しくなった。

だがある日、雪良は出会ってしまった。

絶望の魔女・レイアーノ。

魔法少女でなかった雪良は何されたのかもわからないまま、絶望を埋め込まれた。

レイアーノは相手が持つ一番美しく光る希望を喰らう。

雪良は歌声をレイアーノに喰われてしまった。

いくら歌っても前のような美声は出ない。

まともに歌を歌うことすら出来ない。

希望を絶たれた雪良は表舞台から姿を消した。

それからしばらくして、雪良はキュウベえと名乗るインキュベータに出会う。

キュウベえから魔女のことを聞き、自分の声が魔女に奪われたことを知った。

同時に雪良には魔法少女になる才能があり、魔法少女になって魔女と戦う代わりにどんな願いでも叶えられると知った。

この話をキュウベえから聞いたとき、雪良の中にあっただのは自身の声を取り戻せるという喜びより、自分のように希望を奪われてしまった人がいて、今もどこかで希望を絶たれている人がいるのだという危機感だった。

雪良は自分の歌で希望を与えられることを知った。

ならば再びその歌で希望を絶つ魔女を倒し、人々の希望を守ろうと思った。

雪良は自身の声を再び取り戻したいと願い、魔法少女になった。

取り戻した希望で、誰かの希望を守るために。

「私はレイアーノを倒すことを誓った。そして明日、そのチャンスがくるの」

さやかは雪良が戦う理由を知った。

その上で聞きたいこともたくさんあったが、まず一番に確認したいことがあった。

「事情はわかった。けど……なんで私なの？」

雪良はさやかが魔法少女であることを知っていた。

ならば恐らく他に魔法少女がいることも知っていたはずだ。

実力で言えば巴^{ともえ}マミや佐倉^{さくら}杏子^{きょうし}のほうが良い。

暁^{あけみ}美ほむらの能力ならより確実性がある。

それにも関わらず自分を選んだ理由を、さやかは聞きたかった。

「私たちが似たもの同士だからよ」

「似たもの同士って……同じ魔法少女ってことじゃなくって？」

雪良は首を振った。

「自分のためではなく、他人のために願いを使ったこと——それが似ているところよ」

「!!」

さやかは心臓を抉られたかのような痛みを胸に感じた。

自分がした願い。

その願いにした理由——そしてその結果を思い出したのだ。

「美樹さんがどんなことを願ったかは知ってる。私はそれが悪いことだとは思わない。私だって誰ともわからない人のために願いを使ったようなものだから」

さやか自身も『上条恭介』かみじょうきよすけを救いたいという願いに対しては後悔していない。

後悔などあるわけないのだ。

だがそれがもたらした結果がさやかの心に大きな穴を開けていた。

「美樹さん……。今のままでは心の穴は大きくなるばかりで、いずれ心すべてが飲み込まれてしまうわ。そう、まるで人魚姫の結末のように泡となってしまう」

さやかは苦しそうな表情を浮かべ、俯いたまま何も言わなかった。

「美樹さんはその人に希望を与えた。それは誰にでも出来ることじゃないわ。美樹さんは希望を与えることの出来る人なのだから、その輝きを失ってしまっではいけない」

「私は……そんな風には思えない。強く、無いから」

「美樹さん……」

さやかは俯いたまま、雪良の横を早足で通り過ぎた。

「ちょっと考えさせて」

そういう残し、教室を出て行った。

前日 17:30

さやかの足はいつしか来た公園にのびていた。

「お、また来たのか？」

「リン……」

前に会った時と同じように、天音^{あまね}リンはジャングルジムの頂上に座っていた。

「なんだよ？ ずいぶんと暗い顔してんな」

リンはジャングルジムから飛び降りると、近くのベンチに腰を下ろした。

そしてどこからともなくアイスクャンディーを取り出して食べ始めた。

「そんなの食べて寒くない？」

「いーんだよ。好きなんだから。食う？」

そう言ってアイスクャンディーを差し出すリンを見て、さやかはクスツと笑った。

「なんだよ？」

「なんかどっかの誰かさんに似てるなーって思ったのよ」

リンはどうも思い当たるフシがあるようでムツと顔をしかめた。

さやかはそんなリンの様子もお構いなしに、リンの隣に腰掛けた。

「今日、前にアンタに言われたようなこと……また言われちゃってさ」

「前……？ ああ——」

「わかってはいるんだよね。いつまでもこのままじゃいけないって」

「……とりあえずちょっと話してみな」

「うん……」

さやかは今日雪良に言われたことを話した。

聞き終わるとリンは「ふーむ」と腕を組んで唸った。

「本人がどう思ってるかはわからないけどさ、きっとソイツにとってはとてつもない決断だったんじゃないかな？」

「どうということ？」

「誰かのための願いつてのは何もある一人のためにしなくちゃいけないわけじゃないだろ？」

「んー……まあ。それでも一度失った大事なものをまた取り戻せたなら、それはそれで幸せだと思うけどなあ」

雪良にとって声は希望だ。

失った希望が戻ってきたのなら、最も救われるのは自分のはずだ。

そういった点でさやかとは違う気がした。

「そう言うんじゃないーと思うんだ。一度失ったものは二度と戻ってはこない。願いで取り戻したその『声』ってのはきつともう別物なんだよ。そういう意味じゃソイツは希望を取り戻したって思っちゃいないんじゃないかな？」

「え？」

「それに『魅了したことで動きを封じる』ってのは魔法の力であって、実力で魅了してるわけじゃない。それは本人もわかっていて、それでもその魔法にした。かつて自分のしたかったことを捨ててまで、誰かの希望のために戦いたいと決断することは結構なことだと思っぜ」

雪良は魔法少女になることで、もう二度と人を感動させる歌を歌うことが出来ないとなっていた。

それがわかっていながら、雪良は自分の希望であった『声』を取り戻すことを望んだ。

それは生き地獄のような選択だったのかもしれない。

上条恭介のためと願い、その結果もしかしたら自分に振り向いてくれるかもしれないと淡い期待をしていた。

でもそれは期待であって、あくまで『もしかしたら』のことだ。

そうならないことも当然わかっていた。

わかっていても、望んだ。

何だか似ていた。

（違う……まったく似てない。だって私はわかっていても受け入れられなかったもん）

未だに引きずって、後悔しないといいながら後悔している。

似て非なるものだ。

「まあ、だからわからなくもないぜ。似ているからこそ、さやかに『希望』を持って前を向いて欲しいって思うのもさ。ソイツにとってレイアーノっつゝ魔女を倒すことは人々の『希望』を守ることになる。同時に似たもの同士であるさやかかの『希望』の一端にでもなればいいなあーってことなんじゃね？」

「そうなのかな？」

「たぶんな」

リンは残ったアイスク্যানディの棒をどうやったかはわからないが、消して見せた。

そしてその代わりに棒状のスナック菓子を出現させた。

「お前には信頼できる仲間がいる。親友と呼べる友達や、背中を預けられるやつがさ」

そう言ってリンはスナック菓子をさやかに手渡した。

「ほら、『仲間』のお出迎えだ」

リンが公園の入り口に視線を向けた。

さやかも同じようにそちらに視線を移す。

そこには杏子がいた。

「オレは行くからさ」

「ちょっと待ってよ！」

「ん？」

さやかはカバンを漁り、中から一枚の紙を取り出してリンに渡した。

「さっきもちょっと話したけど、明日うちの文化祭なの。暇だったらきなさいよ」

リンは日時や場所の書かれた紙を受け取った。

「サンキュー。暇だったらお前のライブを見に行ってやるよ」

そう言ってリンは歯を見せて笑った。

さやかもそれに笑顔で答えた。

「おーい、さやかー」

「杏子」

さやかは声をしたほうを向いた。

途端に、背後から気配が消えた。

振り向くとリンの姿がなくなっていた。

「誰と話してたんだ？」

「んー……内緒よ」

「なんだよ、意地悪するなよ」

「まあ、まあ。それより、これ食うかい？」

さやかは杏子の口真似をしつつスナック菓子を渡した。

「なんか気味悪いな。頭でも打ったわけ？」

スナック菓子を受け取りながら、杏子は訝しげな表情を浮かべた。

「気にするなっ。帰ろうっ」

「ちょっと待てっ」

さやかと杏子はそのままワイワイ言いながら公園を後にした。

その様子をリンは木の影から笑みを浮かべて見つめていた。

当日 10:50

蒼井彰あおいあきらは母校でもある見滝原中学校の校門前で一人立っていた。

校門前はたくさんの人ばかりで、またその賑やかな人々を受け入れるかのように校門も鮮やかな飾りが施されていた。

彰は校門にかけられた『見滝原中学校文化祭』の文字を見た。

そして一度ため息をつき、自分の腕時計に視線を落とした。

「遅いな……」

彰は友人の鈴木を待っていた。

元々は一人で来る予定だった。

三日ほど前に鹿目かなめまどかに誘われて文化祭の日程を知った。

せっかくだから久しぶりに母校の土でも踏もうかと思いついたのだ。

そのことを鈴木に話したのが運のつきというヤツだ。

鈴木に是非行きたいと泣きつかれてしまい、渋々了承したのだ。

見滝原中学校は若干、お嬢様・お坊ちやま学校的なところがある。

この文化祭も招待状なしでは校門をくぐる事が出来ない。

ちなみに卒業後の数年は招待状が送られてくる仕組みになっている。彰もまどかに文化祭の話聞いた後、自宅に招待状が郵送されているのを確認した。

招待制になっているものの、招待状は一枚で同伴者を何人連れてきても問題ないため、鈴木のように卒業生に目をつける者も少ない。

「そこまでして行きたいもんかねえ」

彰は誰に言うでもなくそう呟いた。

「わかってないなあー、彰」

「うわっ！？す、鈴木っ」

期待していなかった返事が返ってきたため、彰は素っ頓狂な声をあげて驚いてしまった。

「彰よ、見滝原中って言えば可愛い子揃いのお嬢様学校ってことで有名なんだぞ。俺たち凡夫とは雲泥の差があるのだよ」

「一応、俺もここの卒業生なんですけど……」

「ああ、そうだったな。そのおかげでこうしてここに立っていられるんだもんな！」

鈴木はビシビシと彰の背中を叩いて笑った。

「馬鹿げたことを言うのは今だけにしてくれよ。知り合いの前で恥さらしするのはゴメンだからな」

「わかってるって」

そう言いつつ、すでに女性の姿を目で追っている鈴木を見て、彰は嫌な予感しかしなかった。

校舎外の出展は既に一般公開が始まっているが、校舎内の出展は30分ほど遅れての開始だ。

一般客が入る前に校舎内に危険物等が無いかを確認するためらしい。

まどかのクラスは喫茶店を出展することになった。

ただの喫茶店では定番すぎると、主に男子の案でメイド喫茶になった。

「うわー、すごい。鹿目さんのネコ耳と尻尾、まるで本物みたい……」

「そ、そーかなー？ あははは……」

クラスメイトに頭についたネコの耳と尻尾をいじられながら、まどかは喝いた笑みを浮かべた。

「あれって本物だよね……？」

離れたところからさやかがカメラでまどかを撮るほむらに囁いた。

「baum・クウェーレンの仕業ね。グッジョブよ」

「おい。ほむらさん」

嬉しそうにカメラのシャッターを切るほむらにさやかは白い目を向けた。

「ほむらちゃん。そんなに撮らないでよー。恥ずかしいよお」

照れながら、耳をピコピコ動かしながらまどかが寄ってきた。

「うん……確かにありだね」

その様子を見たさやかが携帯のカメラでまどかを撮りながら呟いた。

「さやかちゃんまでー。こんなの見られたら恥ずかしくて死んじゃいそうだよー」

「そう言ってもねえ……。ソイツがまどかを気に入っちゃってるみたいだし……」

まどかの肩にしがみついているのは熊の姿をした魔女・baum・クウェーレンだ。

魔女なので当然一般人には見えない。

「まどかが嫌ならいっそ倒しちゃうとか……?」

「それはそれでカワイソウだよお」

見た目は可愛らしいぬいぐるみだし、まどかにちょっとしたイタズラをするだけで極めて無害なのだ。

この熊のぬいぐるみとまどかの組み合わせが妙に合っていて、仲間内では癒し系として受け入れられていた。

「まあ、ソイツが満足するまで我慢するっきゃないんじゃない？」

まどかたちがあれこれしているうちに、校内に危険物点検が終了した旨の放送が流れた。

文化祭三回目のまどかたちはこれが同時に一般公開開始の放送であることも知っていた。

「さて、みんな開店だよっ！」

クラス委員の掛け声と共に、まどかたちの文化祭が始まった。

当日 11:15

校内展示開始の放送がかかった頃、既に開始していた校外展示は早くも人で溢れかえっていた。

その中、フリフリの日傘を差し、フリフリのドレスで身を包んだ女性^{せい}が人の目を気にせず^ずに人だかり歩いて^いいた。

人の目と言っても、妙なコスプレや過激な衣装に身を包んだ者もたくさんいるため、対して目立ってはいなかった。

「よお、珍しいじゃねーか。こんなところにいるなんてよ……更紗あ」

九条更紗くじょうさらの前には着物を見事に着こなした少女——天音リンが立っていた。

「あらあー、リンちゃん。リンちゃんこそそんなにオシャレしてどうしたのよお」

「オレだって女の子だぜ？人目くらい気にするんだぜ」

リンがそういうと、更紗はクククと笑った。

「よく言うわあ……ババアのくせしてえ」

「……そりゃ禁句だぞ」

リンは鋭い目つきで更紗を睨みつけた。

しかし更紗はそれを気にするどころか、目を向けることもせず
にリンの横を通り過ぎた。

「てめえ、何企んでる？」

「フッフ……色々よお。それはお互い様でしょ？」

「……」

更紗はそのまま喧騒の中に消えた。

リンは見えなくなるまでその後姿を睨みつけていた。

「更紗ちゃん、リンちゃんを敵に回すつもりっすか？」

人ごみの中から音も無くゴンベえが現れた。

「リンちゃんはオイラが知る限り最強の魔法少女っす。敵に回して
勝てる相手じゃねーっすよ？」

「ゴンちゃん」

更紗は立ち止まり、ゴンベえを抱き上げた。

更紗は笑顔で———気味悪いくらい完成された笑顔でゴンベえと向
き合った。

「私わねえ……別に勝ち負けの勝負をしたくて魔法少女やってるわけじゃないのよお。楽しければいいのよ。例え、その結果で私が死んだって関係ないのよお」

更紗はゴンベえを降ろし、再び歩を進めた。

「でも事が過ぎると、『あの人』が更紗ちゃんに何するかわからないっすよ？」

「そうねえ。確かに……『あの人』だけには嫌われたくないわあ。だからあ——」

更紗は歩みを止め、人ごみの中のある一点を見つめた。

更紗が見つめる先には、佐倉杏子と巴マミの二人がいた。

「私の趣味と『あの人』の目的が一致すれば問題ないわけよねえ。フフフ」

更紗は傘で顔を隠し、押し殺すように笑った。

その様を下から見たゴンベえは純粋な悪意を垣間見た気がした。

「1年しか経ってないのに、なんだかもの凄く懐かしい感じがするわね」

マミは校内に入るなり、そう呟いた。

「アタシなんか学校自体懐かしいわ」

杏子はあまり興味なさそうに辺りを見渡し、チョコ菓子を口に放り込んだ。

「なんだかそう言うこと言われると感動が薄れるわね……。そうそう、校内はここで買ったもの以外、飲食物の持ち込み禁止よ」

「はあ？なんだよそれ？どうせ誰も見てないんだからいーじゃん」

「少しでも頑張ってる皆に貢献しなさいってことよ」

「……貢献するほど金ないんだけど」

二人は校内を歩きながら、途中で貰った出展物一覧に目を通した。

「鹿目さんたちのクラスは喫茶店ね。どんなのか楽しみね」

「喫茶店？だからお金……」

「心配しなくて大丈夫よ。あなたを誘った時点で予想済みよ」

「え？ マミのおごり？ ならゆまも連れてきてやればよかったな」

「ちょっとは遠慮しなさいよ……。まあいいわ。もうすぐ鹿目さんたちのクラスね」

マミたちはまどかたちのクラスに着くなり、思わぬ行列に度肝を抜かれた。

「すごい行列じゃん。何やってんだ、まどかたちは？」

杏子が列から行列の先頭を覗き見ながら言った。

「あっ」

そのとき列の中心くらいで案内係りをしているさやかを見つけた。

「あ、マミさん！ と杏子」

「ついで見たいな言い方やめろよなあ。ところでなんだその格好……」

杏子とマミは顔を合わせた。

さやかは少し照れながら「メイドよ」と答えた。

「喫茶店って『メイド喫茶』だったのね……。どおりで男の子ばかりだと思った……」

マミは呆れた様子で前から後ろへと並んでいる客を見た。

「そーなのよ。まあでも結構可愛いからいいかなーとか。あっ！そうだ！杏子、アンタも手伝いなさいよ」

「え！？なんでアタシが！？」

「どうせマミさんにおごって貰おうとか思ってたんでしょ？それならちょっと稼いで自分で飲み食いしなさいよ」

「な、何わけわからない——ってうわー！」

さやかに引っ張られていく杏子をマミは笑顔で見送った。

見送ったあと、ふと少し前に並ぶ男の人と目が合った。

「あ……蒼井先輩」

「あら、マミちゃん」

彰は順番を後ろの人に譲って、マミの前に入ってきた。

「せっかく並んでたのに良かったの？」

「まあ、ちょっと待つ時間が長くなったって店が逃げるわけじゃないしね。それに一人で退屈だったんだ」

彰は連れに無理やり順番待ちをさせられていることを語った。

その連れはどうも他のクラスの出展物、もとい女の子を追っかけま

わしているらしい。

「考えてみればまどちゃん達とはだいぶ長い付き合いだもんね。マミちゃんがここにいて当然か」

「後輩の頑張っている姿を見るのも先輩の役目でしょ？」

マミは冗談交じりに言うのと、クスリと笑った。

「なるほど……さすがは頼りになる先輩さんだ」

彰も笑顔でそう返した。

列の先頭から、『30分待ち』の声が聞こえてきた。

当日 12:00

やっこの思いで案内されて店に入った。

ちなみに絶妙のタイミングで鈴木は戻ってきた。

その鈴木がマミに絡んで鬱陶しく、マミに申し訳ないのでマミとは席を別にして貰った。

「ほんと頼むから変なこと言わないでくれよ？」

「わかってるって。ところでなんでそんなに念押しするわけ？」

「え？ま、まあ……知り合いの前で恥じをかくのは嫌だろ？」

「ふーん。ま、それより早く注文決めて、注文取りに来て貰おうぜ。どの子が来るか楽しみだなあ」

鈴木はそういいながらメニューを鬼気迫る勢いで見つめ始めた。

彰はそんな鈴木に少々不安を感じながらもとりあえず無事にここまでこれたことにホッとした。

（こいつと一緒にだろくなことが起きないからなあ）

中学時代に剣道部で出会ってから何かと一緒に過ごしてきた。

鈴木はいわゆるオンオフの出来る人間で、剣道に取り組む姿勢は確かに立派だが、プライベートでは女癖が悪いのだ。

何度かダシに使われたこともあった。

「よし、決めた！コーラとチョコレートで」

「なんだ、その組み合わせ？」

「ここに来るまでに金を使いすぎてな……。一番安いのか頼めないんだ」

鈴木は引きつった笑顔を浮かべてメニューを置いた。

「すみませーんっ」

鈴木が少々大きめの声で店員を呼んだ。

「あ、はい！」

返事と共に駆け寄ってきたのはまどかだった。

「彰さんが来てるって言うからウェイトレス係、代わって貰ってきちゃった」

えへへと笑い、尻尾をユラユラ動かした。

「そうなの？何だか嬉しいなあ。ところでその耳と尻尾――」

「うん、凄く似合ってる！凄く可愛いと思うよ！」

と、彰を遮って詰め寄ってきたのは鈴木だった。

「え、えっと……ありがとうございます」

誰だって後ずさりするようなテンションだ。

当然、まどかも引いていた。

「こいつは俺の腐れ縁というか……むしろ腐ったやつというか……」

「そうなんだよ！こいつとはかなり長い付き合いでさあ！」

「えっとっ！これとこれとこれで！」

彰は鈴木を殴り飛ばしてからメニューを指差して注文した。

「ごめんね、あとで時間があったら埋め合わせするよ」

「大丈夫だよ。結構多いから、こういうお客さん……」

まどかは苦笑いを浮かべて足早に奥に消えた。

「なんだよー。お前、いつ知り合ったんだ？あんな可愛い子とさ」

殴られた頬をさすりながら鈴木はジト目を彰に向けた。

「まあ……色々だよ、イロイロ」

まさか魔法少女の話をするわけにもいかず、とりあえず適当にごまかした。

（やっぱりこいつ……良いヤツなんだけど、トラブルを生む星の元に生まれてやがる）

悪びれる様子も無く周りの女の子に声をかける鈴木を見て、彰はため息をついた。

「お待たせいたしました」

「あ、はい——」

彰の顔が店員さんに対しての愛想笑いが、まったく愛想を振りまくことが出来ないくらいにが引きつった。

「ほ、ほむらちゃん」

明らかに怒気が身体から溢れているほむらを前に、彰は命の危険を感じた。

（まどかちゃんがあんな風に絡まれてるのを見て、ただで済みますわけがない！）

「ごゆっくり」

「へ？」

呆氣にとられるくらいすんなりとほむらは物を置いて席を離れた。

「今の子、すごい美人だったな！ってあれ？」

「ん？」

鈴木の目が点になっていた。

それもそのはずだ。

頼んだはずのチョコレートが皿に一つも乗っていないのだから。

「あのー、店員さん。お皿がまっさら！なんちゃって」

鈴木がつまらない冗談をほむらに向けて言うと、ほむらは半ば睨みつけるような目で鈴木を見つつ指差した。

「お客様、ご冗談を。その口についているのはなんですか？」

「え？はっ！？あ、あまい！」

いつの間に鈴木の口の周りにチョコレートがついていた。

そして鈴木の口の中にはアルミ箔に包まれたままのチョコレートが詰まっていた。

「ぎゃああああ！アルミ噛むと気持ち悪い！！」

鈴木はコーラでチョコレートを流し込んだ。

「な、なんだ？まるで時間が消し飛んだような。スタンド攻撃か！？」

「まあ……間違っではないいな」

ほむらが時間を停止させたのだ。

まさにほむらにしか出来ない報復だ。

「輪切りにされなくて良かったな、鈴木」

彰はそう同情してやるしかなかった。

当日 12:30

「平和ね」

「平和だなあ」

マミと彰は賑やかな店の様子を見つつそう言った。

先ほどまで騒いでいた鈴木は剣道部のマネージャーしている中沢に偶然出会い、連れてかれてしまった。

あとで知ったことだが、まどかと同じクラスにその中沢の弟がいるらしい。

そんなこんなで騒ぎの元凶がいなくなり、いわゆる普通？のメイド喫茶の光景が戻ってきたわけだ。

「わけだ……じゃないよ。なんでアタシがこんな格好しなくちゃいけないんだよっ」

マミと彰の前にメイド服を来た杏子が突っかかってきた。

「あら、佐倉さん似合ってるじゃない」

「確かに。可愛いと思うよ」

あっけらかんとそう言う二人に杏子は噛み付くように反発した。

「そういう問題じゃないだろう。アタシがこんな……こんな恥ずか

しい格好しなくちゃいけないんだ!」

「そう言わずにさ、私の代わりに頑張ってよ」

制服に着替えたさやかが杏子の肩を叩いた。

「だからなんでアタシがさやかの代わりなんだよー!」

「仕方ないじゃない。これからバンドのほう行かなくちゃいけないんだから」

「それとアタシが代わりになるのにどういう繋がりがあるわけ!？」

「まー、人が減るよりは良いんじゃないかなって」

さやかが悪意ある笑みを浮かべた。

杏子はまんまとはめられたのだ。

「アタシは嫌だからな!」

「そんなこと言わないでよ、杏子ちゃん。似合ってるし、可愛いと思うけどなあ」

まどかがそう言うと、他のクラスメイトも頷いたり、「可愛い」と言ったりしてフォローした。

「そ、そーかな?」

「そーだよっ!一緒にがんばろうよ!」

まどかが杏子の手を取った。

「わ、わかったよ……。何だかまどかに頼まれると調子狂うなー」

「ウェヒヒ。仕事もそんなに大変じゃないから、すぐ覚えられるよ」

杏子はまどかに引かれ、クラスメイト共に店の奥に連れて行かれてしまった。

「単純なやつ……。じゃあ私は行って来るから」

「頑張ってね、美樹さん。絶対見に行くから」

さやかもマミに見送られて教室を出て行った。

「蒼井先輩とこうやって二人だけになるのは初めてね」

「ん、そーだね」

マミは一拍置いて言葉を口にした。

「蒼井先輩は、何だか変だなって思ったことありますか？」

「変って？」

「漠然としてるけど……。変わった事とか、変わってしまったこととか……」

マミはここ最近起きている事件の数々がどうも無関係とは思えなか

った。

その証拠に彰の件も、クロードの件も、すべてまどかを狙ったのとだった。

「ワルプルギスの夜を倒して平和になったはずなのに、まだこうやって争いは続いているわ。それも何だか偶然起きているわけじゃない気がする……」

「……マミちゃんが感じていることを俺も少なからず感じてる。ただそれが何なのかはやっぱりわからない」

「そう……ですよね」

マミはティーカップをさすりながら、ため息をついた。

「ただ……」

「ただ？」

「ただ、引っかかることはあるんだ。不思議な感覚でね」

「それって……?」

彰は簡単にクロードとの戦いの時に使った『痛みの翼』の話をした。

マミもその話はまどかから聞いていて何となくは知っていた。

「痛みの翼を使った時、その負荷に耐えられなくて気を失ったんだ。そのとき夢を見たんだ」

「夢？」

「どんな夢だったかはわからない……というか思い出せない。でも漠然とそこでとても大切な人と出会った——そう思うんだ」

覚えていないはずなのに、ぼんやりと濃い霧の向こうに立っているかのようにぼやけた人影が浮かんでくるのだ。

「それを思い出せば、何かが変わりそうな気がする。そう感じるんだ」

「もしかしたら妹さんなのかもしれないわね」

「え？」

「あなたの『痛みの翼』は癒した人を理……天国に導くのでしょ？ということは、天国があるってことよね。だったらあなたの夢に出てきたのは天国であなたを見守る妹さんなんじゃないかしら？」

考えたことも無かった。

そもそも『痛みの翼』が導くとする理という存在も能力を手に入れたときに漠然と、まるで最初からそれを知っていたかのように頭の中に浮かんできた。

だからそういう物なのだろうとしか認識しておらず、それが実際何なのかなど考えたことも無かった。

天国。

マミの言うとおり、それが正解なのかもしれない。

だとすれば、死後の楽園とされる天国が存在するとするならば、明奈がそこに辿りついていられるかもしれない。

「そうだと……いいな。もしそうだったら、思い出したときに幸せになれそうだ」

明奈が天国に行けたのだという確認にもなる。

それがわかるだけでも彰には幸せだった。

マミはこれ以上この事には触れなかった。

幸せと感ずるための一步を歩んだのだとするならば、それを台無しにするわけには行かない。

そう思つての優しさなのだろう。

だからマミはここで話題を変えてきた。

「そういえば、蒼井先輩はなんで『騎士』なのかしら？」

「え？」

マミからしてみれば本当に、そういえば、なんとなく質問だったのだろう。

だが彰自身、その質問がなぜなのか答えられなかった。

何せ、その理由自体が『なんとなく』だったのだから。

「なんとなく護るためには騎士かなと……」

「でも蒼井先輩は剣道やってるし……聞いた話だと居合いもやっていたんでしょ？」

「うん、この街に来る前にね」

「ならイメージ的には騎士というより侍って感じが似合う気がするけど……」

『なんとなく』で騎士という姿をしているが、攻撃スタイルはどちらかというと剣道や居合いで学んだものが大きく出ている。

そういう意味では、サムライ風のほうがもしかしたらより良く戦えるのかもしれない。

「考えたことも無かったなー。でもこれ以上強くなろうとかあまり考えたこと無いから。戦いが無いことに越したことはないんだからね」

「そうね……確かにそうよね」

彰とママはワイワイと賑わう店内を見た。

「平和が一番さ」

そしてそう一言、彰は呟いた。

当日 12:45

さやかは教室を離れたあと、昨日雪良と話をした多目的教室に足を運んだ。

多目的教室には既に雪良の姿があった。

「待っていたわ、美樹さん。協力してくれてありがとう」

「うん……まあ、やっぱり魔女をそのままにしておくのもって思うしさ」

さやかは言葉を濁して言った。

雪良はあまり気にする様子もなく、笑顔で返した。

「それでどうするつもりなの？何も考えなしってことはないでしょ？」

「もちろん……と言っても至極単純なことよ」

雪良は机の上に文化祭のスケジュールが書かれた用紙を広げた。

さやかたちのライブは午後3時から1時間ほどだ。

「レイアーノは夕方にしか姿を現さないわ。ちょうど私たちの演奏が終わるくらいかしら」

「でもうまいこと私たちの前に姿をだすの？」

「レイアーノは人の希望を食べる魔女よ。人が集まるところに吸い寄せられるようにしてやってくる。今日、この近辺で見滝原中学ほど人が集まる場所は無いわ」

「一応根拠はあるんだね。でもこんなところに魔女が現れたらパニックになるよね……？」

魔女や使い魔は一般人には見えない。

だが結界に取り込まれれば別だ。

レイアーノが結界を展開し、皆が取り込まれてしまえばパニックになることは免れない。

「魔女を見たらきつとそうなるわね。だから見えなくすればいいのよ」

「見えなくするって、もしかして……」

さやかは雪良の魔法『人魚の歌声』のことを思い出した。

聞いたものを歌声に夢中にさせ、周りを見えなくする能力。

「確かにそれならパニックを防げるかも……」

「私は歌うことしか出来ないから、代わりに美樹さんにレイアーノを倒して欲しいの」

「そのために私だけ能力を回避させたんだね……」

昨日されたキスのことを思い出し、さやかは頬を少し赤らめた。

「でも一つ注意しなくてはいけないのが、『人魚の歌声』の効力は歌一曲分の時間だけ。対レイアーノで歌うつもりの曲は7分だから、その間に倒さないといけない」

「7分……。そのあともう一回歌うってのは？」

効力が歌一曲分なら、また同じ歌を歌えばいい。

だがそう単純に行くものではないらしく、雪良は首を振った。

「歌というのは耳に入らなくては意味がないの。つまり歌に集中できない状況に陥ってしまえば、声すら耳に届かない。そうなれば私の能力なんて効かないわ」

『人魚の歌声』から解放され、意識が元に戻った瞬間に魔女結界の中にいたらやはりパニックになるだろう。

そうなれば誰の声も届かない。

「だから7分で倒して欲しいの」

「やっぱり誰かを……」

さやかには時間内に倒せる自信が無かった。

やはり誰かに協力して貰うべきなのではないだろうか。

杏子やマミなら理由を話せば手を貸してくれるだろう。

誰かに手伝って貰おう。

そう口にしかけた時、頭の中にリンの言葉が蘇ってきた。

『同時に似たもの同士であるさやか』『希望』の一端にでもなれば
いいなあーってことなんじゃね？』

（そうだ……。これは白井さんがくれた一步を踏み出すための戦い
なんだ。私がやらないと意味がないんだよね……）

自分の願いによってもたらされた結果に後悔し、絶望してしまった
弱い自分。

それを振り切れず、今なお引きずっている自分。

そんな自分を叩き斬るくらいの力と気持ちが今こそ必要なのだ。

「私、頑張るよ。必ず倒して見せるから！」

結果に絶望するのではない。

今を受け止められるように、まず強くなろう。

好きな人を諦めるのではなく、振り向いて貰えるように前を向いて
いこう。

そのための一步を踏むのだ。

当日 13:00

「失礼します」

上条恭介は多目的教室の扉をゆっくり開けた。
かみじょうぎようすけ

今日ライブ本番を控えているさやかを元気付けようと音楽室に行ったのだが、そこにさやかの姿はなかった。

音楽室にいた梶浦優子かじうらゆうこにさやかのことを聞くと、多目的教室にいるのではと言われ、ここにやってきたのだ。

しかし扉を開けて中を見ると、またもやさやかの姿は無く、そこにいたのは見知らぬ女子生徒だった。

「お客さんなんて珍しい。何か用？」

「えっと……友達を探していたんだけど……」

「美樹さんならさっき出て行ったわよ。上条くん」

さやかを探していたこと、そして見知らぬ女子生徒から名前を口にされ、恭介は驚きの表情を浮かべた。

「何で僕のことを？それにさやかを探してることも……」

「今日美樹さんと演奏をするんだもの。美樹さんからちょっとくらは上条くんの話も聞いているわ。それに上条くん、アナタ結構有名人だしね」

恭介はようやく目の前の女子生徒のことを思い出した。

文化祭のスケジュール表にライブを行う生徒の名前と顔が載っていたのだ。

「確か……白井雪良さんだったよね？」

雪良は小さく頷くと、窓の側の壁に寄りかかった。

窓から入り込む太陽光が反射し、雪良の姿を半分ばやかした。

「美樹さんならきつと音楽室に戻っている頃よ」

半分かすんで見える雪良の姿だが、その声だけは澄んで聞こえ、確かにそこにいるのだと誇張させた。

「じゃあ入れ違いだったんだね。邪魔してごめん」

恭介は居心地の悪さを感じていた。

微笑み、澄んだ声を持つ目の前の少女から鋭く突く様な気配を感じたからだ。

そのため一刻も早くここから離れたい——そういう気持ちにかられた。

「ねえ、奇跡って信じる？」

「え？」

突然雪良はそんなことを口にした。

「常識では起こりえない、不思議な出来事……。辞書を引くところな風にでるのかな？ 上条くんは信じる？」

突拍子も無い、まるで人を馬鹿にするかのような質問だ。

だが恭介は真面目にそれに答えた。

「あるよ。僕がこうしていられるのは奇跡のおかげだからね」

今の医学ではどうしようも出来ないときじを投げられた動かない腕。だがそれを否定するかのごとく、バイオリンを弾けるようになるまで回復した。

医者が信じられないと声を揃え、奇跡が起こったとしか思えないと言わしめた。

恭介自身もこれは奇跡だったのだと疑わなかった。

『奇跡も、魔法も、あるんだよ』

さやかの言葉だ。

腕が回復する直前にさやかが言った。

まるでさやかのその言葉を引き金にして起こったかのようにも思えた。

「私も奇跡はあると思う。でも私の思う奇跡は夢物語のようなものじゃないわ」

感傷に浸る恭介に水を差すように、雪良は否定的なことを言った。

「奇跡は犠牲を伴って起きるもの。何かを犠牲にして得られた結果が奇跡なんだと思う。人魚姫が人間になるために美しい声を犠牲にしたようにね」

「奇跡は人を幸せにするものだと思ふよ。現に僕はとても幸せだ。仮に僕の腕が治ったことが奇跡だったとして、それで不幸になった人なんていないよ」

「そう……」

雪良は少し残念そうな表情を浮かべ、壁から身体を離した。

そして恭介の横を通り過ぎ、教室の扉を開けた。

「白井さんっ。なんでこんなことを聞いたんだい？」

雪良は顔だけ恭介に向けた。

「王子様が、自分を助けたのが人魚姫だと気付いていたのならどうなっていたのかしらね」

雪良はそう良い残して行ってしまった。

どういふことなのか、雪良が何を伝えたかったのか、恭介にはまる

で理解できなかった。

ただ去り際に見せた雪良の残念そうな表情が、退院の時にさやかが見せた表情に似ていた。

当日 13:30

校内の賑わいは相変わらずだが、昼を過ぎたことで人の動きもだいぶ変わってきた。

昼前くらいまでは昼食をとろうとする者たちが飲食系の催し物に集まっていたが、それも今はだいぶ緩和された。

その代わりに展示系の催し物が昼前と比べて混み始めていた。

まどかのクラスも昼あたりが一番のピークで、今はだいぶ空いて来ている。

午前中に缶詰状態で働いていた者も少しずつ休憩に入れるようになっていた。

「午前中だけでクタクタだよお」

まどかはため息をつきながらそう愚痴った。

「すごい盛況っぷりだもんね。杏子ちゃんが入ってからまた増えた気もするし……」

彰は自身も並んだ行列を思い出し苦笑いを浮かべた。

彰は休憩に入ったまどかと少し遅めの昼食をとろうとまどかの友人のクラスに来ていた。

一緒だったマミは同級生と会う約束があるらしく、彰たちよりも早

く教室を後にした。

「そういえば彰さんって見滝原中にいた時、すごい人だったんですね」

「すごいって……何が？」

彰が何を食べようと陳列されているサンドウィッチを見ていると突然まどかがそんなことを言った。

「さっきクラスの子から聞いたんです。三年間無敗の天才剣士だったって」

「ああ、剣道の話か。昔、剣道じゃないけどそれに似たようなことやってたから。それになんていうか……相性がよかったのかもね」

昔から運動神経には恵まれており、大抵のスポーツはこなせた。

だがどれも続がなく、周りからは勿体無いと言われたものだ。

ただ見滝原市に越してくる前にやっていた居合いだけは続いた。

たまたま親戚が居合い道場を営んでいたため、やってみたというだけだったのだが。

そのあと見滝原に越してきてからはじめてた剣道も妙にしっくりきた。もしかしたら前世はマミのイメージ通り、サムライだったのかもしれない。

「うらやましいなあ。私って何の取り柄もないし……。勉強も運動も普通……。何とかの天才」とか言われてみたいなー」

胸元のリボンを弄りながら、まどかは心底残念そうに取り柄の無さを嘆いた。

彰はそんなまどかを見て声に出して笑ってしまった。

「笑わないでくださいよー。本当に気にしてるんだから」

「いやいや、別に悪気があったわけじゃないんだよ。ただ変なこと言うなあってさ」

「変なこと？」

「まどかちゃんは『優しい』って言葉を体現したような人だよ。『優しい』ことだって立派な取り柄だよ。つまりまどかちゃんは取り柄の塊りってわけだ」

そういう彰をまどかはどこか腑に落ちなそうな顔で見上げた。

「なんだかうまく誤魔化されてるような……」

「ふふ。さて、どーかな。さあ、さっさと会計済まさないと時間なくなっちゃうよ」

「あ！やっぱり誤魔化してるっ」

商品を持ってレジに向かう彰を、まどかは駆け足で追いながらそう言った。

食べ物を購入した二人は、彰の提案で屋上を訪れていた。

普段はあまり人気のない屋上だが、外からたくさんの人が来ていることもあって、ぼつぼつと人の姿があった。

「屋上にしようって言うっておきながら、まどかちゃんにはあんまり良い思い出のないところだね……」

所々につい最近修復したであろう痕跡が残っていた。

そしてその痕跡を作った張本人が自分であることを彰はわかっていった。

まどかを、そしてほむらを傷つけてしまった場所。

まどかにとって良い思い出の場所であるはずがなかった。

「大丈夫ですよ。私も、ほむらちゃんも気にしてないし……。それに私は彰さんが無事で今ここにいてくれるのが嬉しいから」

そう少し照れながら笑顔で言うまどかに、彰の心臓が高鳴った。

（可愛すぎだろ……）

彰はまどかの笑顔と優しさに危うくノックダウンさせられそうになったが、何とか持ちこたえた。

食事する場所を確保しようと先に行くまどかの背中を見ながら、彰は改めて思った。

（『優しさ』が取り柄ってのは本当なんだよ。その『優しさ』に救われた人はたくさんいるんだから）

心の奥底から誰かを思うことの出来る人間がこの世にどれほどいるのだろうか。

人は口で綺麗事は言えても、実際には自己犠牲を嫌う。

だからどうしても自己保身的になってしまうものだ。

それはいけない事では決していないし、生きる物として当たり前のことなのだ。

だがもしもその当たり前に反して自らを犠牲に出来るものがあるとしたら、それは神や仏の類に近いものなのではないかと思う。

（そういう意味ではまどかちゃんは神さま……いや、女神さまなのかもしれないな）

我ながら大仰な言い方だなと思った。

それでもあながち間違ってもいないような気にもさせた。

まどかが手を振りながら彰を呼んでいた。

彰はそれに頷いて返し、足早に向かっていった。

当日 13:50

彰たちが食事を終えた頃には、屋上もだいぶ人影がなくなってきた。

14時を過ぎた頃から、各部活や有志による大型イベントが行われる。

さやかたちのライブもそれに含まれるのだが、大体の生徒や一般客はこれらを目当てに目的の場所に集まっていっているはずだ。

そのため今いる屋上に限らず、今まで込み合っていた催し物も人の姿が無くなっていつているだろう。

「なんだか終わりに近づいてるって感じで、ちょっと寂しいなあ」

ふとまどかがそう言った。

まどかは今年が最後の文化祭なのだ。

今まで以上に感慨深いものがあるのだろう。

「俺みたいに卒業したあとまた来ればいい。在学中とはちょっと違うかもしれないけど、それはそれで楽しいもんだよ」

「そうかなあ……そうだといいな……」

「そうそう。今度は客として、皆と遊びに来ればいいじゃない」

「そうだよね！皆と、出来たらパパやママやたつくんとも一緒に――」

まどかは『家族でいければ』といいかけたところで言葉を止めた。

彰は家族を、大切な妹を失っている。

家族の話はある意味タブーなのだ。

彰はまどかの様子から、考えてることを悟り、嫌な顔はせずに軽くため息ついて笑顔を向けた。

「明奈のことなら気にしないでいいよ。寂しくないと言えば嘘になるけど、今は前ほど苦しくはないんだ」

「でも……ごめんなさい」

「いってば。それに俺がここに誘ったのは、明奈との思い出の場所でもあったからなんだ」

「思い出の……？」

彰は頷くと、あるベンチを指差した。

「明奈は、昔はまだ一人で出歩けるくらいは元気だね。それでも学校は休みがちだったから、友達付き合いがうまくいなくて、人気の少ないここで一人でお昼にいたんだ。だから一人じゃ寂しいだろうって、あそこのベンチで一緒に食事をしたんだ」

彰は懷から自身のソウルジェムを取り出し、太陽にかざした。

穢れの色とは違う、ブラックダイヤモンドのような輝きを放つそのソウルジェムは太陽の光を浴びてさらに輝きを増した。

「俺がこいつに取り付かれていた頃は、明奈との思い出に触れるのが怖くてここには来れなかった。でもまどかちゃんやほむらちゃんに出会って、自分の間違いに気付けた。間違いに気付いて前に進もうと思えるようになった。だから今日はちゃんと一步を踏み出せているかの確認をしたくて、思い出の場所でもあるここに来たかったんだ」

かざしたソウルジェムを元の場所に戻すとまどかに首だけ向けて言った。

「だからもう心配しなくてもいいよ。この力も今じゃ手に入れたことに感謝しているくらいだし」

「そうなんですか？」

「この力のおかげでまどかちゃんを護る騎士でいられるんだからさ」

彰はニヤリと笑った。

対してまどかは少し頬を赤らめて俯いた。

「なんか恥ずかしいなあ。でも……私を護ってくれる騎士なんてなんだか物語みたいでロマンチックかも」

そうやって恥ずかしがりながらも無邪気に笑うまどかを見るのが彰は好きだった。

今、この瞬間を幸せだと、平和だと思わずにいつ思うのだろう。

この瞬間がずっと続けばいいと思う。

だが確実にまどかを狙うものがいて、それがこの日常を奪おうとしている。

ならば戦おう。

この瞬間を、まどかを護るために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9049z/>

魔法少女まどか☆マギカ ～人魚の歌声～

2012年1月12日13時45分発行